

三菱ディレクトフォースについて

私たちが東京について1番先に行ったのは三菱商事の本社ビルであった。三菱商事のビルに着くとまず最初を感じたことは、日本を代表する企業の1つであることを感じさせる、ビルの重々しい雰囲気であった。しかしそれと同時に三菱の社員の方々からは明るく暖かい雰囲気も感じた。東大見学に行く前先生方からは三菱本社ビルに入ることなく退社する社員がいるということや、父親からはエリートしかいないとこだぞと言われていたので、てっきり固い感じだと思っていたから、そのような雰囲気が感じられたのは意外であった。ここではただ真面目なだけじゃ通用しないのだと感じた。

三菱商事の企業説明で1番印象に残っているのは商事とは何か、ということである。

〇〇商事、〇〇商社というような名前の会社は何度も目にしたことがあるが、何をしているのか全く想像がつかなかった。ただ名前に「商」という字が入るのだから物を売る会社なのかなあ、と勝手に思っていた。三菱商事の社員さんのお話によると、商事とは、外国との輸出入貿易や、国内での物資の販売、金融、保険など、幅広い分野のものを扱う商業を営む会社形態である。これには驚いた。本当に沢山の分野で三菱商事が活躍している。「ラーメンから飛行機まで」これは三菱商事が扱う分野がとても広いことを端的に表す言葉だそうだ。私たちは知らないところで三菱商事のお世話になっているのである。

三菱商事が行っていることはそれだけではない。社会貢献や地球環境を守る活動も積極的に行っているそうだ。私はあらゆる場面で活躍する三菱商事に深い感銘を受けた。

次に三菱商事の三人の社員さんからお話して、一番印象に残ったのは、金属資源についてのビジネスを行っている社員さんからのものであった。このビジネスは海外の金属資源の工場への投資を通じて、資源が少なく、金属を自給することが難しい日本に、安定的に金属を供給することが目的だそうだ。この社員さんはアルミニウムの担当の方だった。精錬するのに大量の電力を必要とするアルミニウムは、水力発電所の力を借りることが多いそうで、日本では雪解け水が豊富な富山県などでアルミニウム精錬が盛んだそうだ。しかし日本にはアルミニウムの資源、ボーキサイトがないため、全量を外国から輸入しなくてはならないのである。その社員さんはかつてモザンビークのアルミニウム工場に派遣され、そこで仕事をされた経験をお持ちであった。日本企業が現地で生きていくためにはその地域との共生がとても大切で、学校を建てたり、安全な水を確保することの出来る井戸を掘ったりするなど地域貢献にはかなり力を入れたという。この社員さんは海外勤務を通じて人間として大きく成長することができたそうだ。日本に居ては気づかない、色々なことに気づくことができ、毎日が新鮮な驚きの連続だそうだ。その時の経験は今も生きているという。私は将来海外で働くなんてことは微塵も考えたことがなかった。しかしこのお話を聞き、少し海外で働くということに興味を湧いた。自分がどこで働くか、これからよくよく考えていきたいと思う。

次は三菱商事の社員さんとのディスカッションで印象に残ったことである。二つ挙げたいと思う。

一つ目は、日本以外に商事という会社形態を成り立たせることが出来た国はないということである。なぜ海外に商事がないのか。どうやら昔はあったそうだ。しかし、どこもうまくいかず、消えていき、終いにはなくなってしまったそうだ。それではなぜ日本では商事が成り立つのか。ディレクトフォースの方がおっしゃっていた。「日本は元々農耕民族だった。そして欧米諸国等は狩猟民族だった。農耕はなかなか1人でやるのは難しい。皆と協力してやらなくてはならない。しかし、狩猟はどちらがより大きな獲物を狩ることができるか競い合い、そして、それから皆に獲物を分け与えていた。商事は協力がとても大切だ。だから日本には出来て、欧米諸国等は真似しようとしても出来なかったのだ。」協力の大切さを改めて感じた。運動会という行事が日本にはあるが、これは日本だけのものである。運動会には団結力、つまり協力することが非常に重要だ。これはほんの一例に過ぎず、日本では、小さい頃から協力するという力を伸ばす訓練ができる様々な機会がある。こういう部分でも協力について差がつくのではないかと感じた。

二つ目は、刺激を自分から求める、ということである。例えば、日本は世界でもトップクラスの耐震技術を持っている。それは何故だろうか。幾つかの理由があるだろうが、一番大きな理由は、日本は地震が多いということであろう。つまり、地震という刺激がなければ、ここまで日本の耐震技術は発達しなかったであろう、ということだ。ヨーロッパ諸国を見ればその予想が正しいことが直ぐに分かる。これは人間にも同じことが言えて、人間も何らかの刺激を受ければ、それに反発して自己の能力を伸ばす、又は、新しい能力を獲得することができる。この話をしてくれた社員さんは高校の時にドイツに留学し、三菱商事に入社後も海外を飛び回ったそうだ。その豊富な海外での体験が自分を伸ばしてくれたという。例えば簡単なものであれば、目を合わせて話すということであったりとか、テーブルマナー等である。その土地その土地で文化は全く違うから、郷に入っては郷に従えというように、自分がどんどんいい意味で変わっていくのを感じたそうだ。

二つ、海外について同じようなことを書いてしまったが、私は今回の三菱商事の訪問でそれだけ海外に魅力を感じてしまった。様々な国で働き、自分を磨くー 将来そうできるような職を今から探してみようと思う。

企業大学訪問について

私は三菱商事に行くまで、教師という職に関心を持っていた。だから今回、日本の小学校の頂点に立つとも言える、筑波大学附属小学校にお邪魔した。素晴らしい学校がある街は街自体が他とは違うーこれは私がケンブリッジ大学を訪れた時に感じたことである。ケンブリッジ大学は、その名の通りイギリスのケンブリッジにあるが、ケンブリッジは勉強するための街だ、と私は思った。街中に本屋が立ち並び、そして静かであった。何故か口数が段々少なくなり、そして無性に勉強したくなるのである。筑波大学附属小学校の周辺でも、私は同じような感覚を覚えた。この学校は違ふと身をもって感じた。

学校では校長先生が出張でいらっしゃらなかったため、社会科の先生が対応して下さいました。そのお話の中で印象に残ったことを一つ挙げたいと思う。

それは常に教育水準を向上させる探究を怠らない事である。事前に調べ、分かっていたことであったが、筑波大学附属小学校は先生にとっての学校でもある。常に何人かの教育実習生が居て、更に毎日のように全国各地だけでなく、海外からも授業を見学に来る先生がいるそうだ。丁度私たちが訪れた時は、国語の研究会を行っていて、全国の国語教師が集まっていた。ここはこう教えた方がいいのでは？こういう捉え方もあるのでは？などより良い授業を作ろうと活発な議論が交わされていた。勿論中心は筑波大学附属小学校の先生方で、その方々の授業をビデオで見せてからの討論だったようだ。このような集まりはかなりの頻度で行われているそうだ。また日本だけではなく、インドネシアやタイなど外国でも出前授業を行い、討論するそうだ。

日本の教育をリードしていく、現状に満足しない、学校の強い熱意を感じた。これは教育についてだけでなく全てのことに通じる。常に向上心を持って生活していこうと思う。

まとめ

三菱商事で教師という職を目指す未来がぐらついた私であったが、筑波大学附属小学校の先生方のように、教師になっても世界に行けることを知り、また考え直している。これから教師と全く違う職を目指すかも知れないし、海外に興味がなくなるかもしれない。ただ、後で後悔しないよう、今の内に経験を積み、自分に合うものを探ることが重要だと思う。折角二高に入ったんだから、日々新しいことに挑戦し続ける生活を送っていこうと思う。以上。